

啐啄（そったく）

もうすぐ2学期が終わります。2学期の後半は新型コロナが小康状態となり、子どもたちも落ち着いて生活することができました。ちょうど秋まっ盛り。子どもたちは何度もわくわく山に登って栗拾いやどんぐり拾いをしたり、下の空き地に下りてバッタを追いかけたりして、存分に堪能しました。



教育課程（新二幼プラン）でも、園の特徴を生かして自然とのふれあいを取り上げています。「環境」の領域においては、以下のねらいをもって活動しているところです。

0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児
身近な環境に興味や関心をもち、見たり触れたり、探索したりする。	戸外遊びを通して、季節の草花や虫などに興味をもつ。	自然や生き物に親しむ中で、興味、関心を膨らませながら触れ合う楽しさを体験する。	身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもち。	身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。	身近な事象を見たり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

年齢とともに自然とのかかわり方も次第に深化していきます。そして、遊びが主体的になってきます。どこまでが安全で、どこからが危険か自分で判断できるようになってくるからです。低年齢の頃から自然に触れながらしっかりと遊びながら身に付けていく力です。

先日、年長の子どもたちが新しい遊びを考えました。落ち葉の斜面を滑って楽しむ遊びです。でも、何も敷かないで滑った経験のある子が、「痛いし、あまり滑らなかったよ」と反論。指導者はそこで、どんな道具があったらよく滑り、痛くないかみんなに考えさせました。指導者の方から「これを使いましょう」とは言いません。「そりがいいんじゃない?」「でも幼稚園にはないよ。」「風船はどう?」「割れてしまうよ。」などなかなかいいアイデアが浮かびません。やがて、ある男の子が発言。「段ボールがいいんじゃない?痛くないし、草滑りでもしたことがあるよ。」「いいね、それ。」「さんせーい!」

指導者が様々な大きさの段ボールを部屋に持って来て、いよいよ落ち葉滑りの段ボールそりの製作。大きさやデザインもそれぞれ工夫し、個性のある大満足のそりが出来上がりました。

禅の教えに「啐啄」という言葉があります。鶏の雛が卵から生まれ出ようとする時、殻の中から卵の殻をつついて音をたてる。(啐) その時すかさず親鳥が外から殻をついばんで破る。(啄) この「啐」と「啄」のタイミングが絶妙に一致して初めて殻を破って雛が産まれる、これを「啐啄同時」と言うそうです。落ち葉滑りの遊びをめぐる指導者と子どもたちのやりとりは、まさに啐啄同時と言えるのではないのでしょうか。

子どもの自立を促す時、早過ぎても遅過ぎてもいけません。早過ぎると子どもは自信を失い、遅過ぎると親への依存が強くなり残ってしまいます。難しいようですが、大事なことは、今の発達段階で楽しんでいる遊びを満喫させてあげることだと思います。大人がレベルを上げず、現在のお子様は何度も繰り返し楽しむ遊びに根気よく付き合ってください。そうすれば、やがて自分から卵の殻をつつき始めます。年長の子どもたちが、段ボールそりを考えつくことができたのは、小さい頃からわくわく山で自由に遊び込んできたからだと思います。(園長 寺本 明生)